

〔資料〕

## 浄土木食空無撰『巡六地藏慈悲利益記』翻刻と解題

関口 静雄

〔解題〕

浄土木食空無撰『巡六地藏慈悲利益記』を翻刻紹介する。底本に駒澤大学図書館蔵松會三四郎板を採った。浅学にして他に所蔵あるを知らない。翻刻を御許可下さった駒澤大学図書館に甚深の謝意を表す。

本書は四穴袋綴装一冊。縦約二十八糎・横約十九糎。表紙に「巡六地藏慈悲利益記」の摺題箋、口絵に地藏菩薩像影、扉初オウに三縁山増上寺三十二代貞誉了也と三十四代證誉雲臥の武州六地藏結縁證明の六字名号がある。以下丁付三十七丁。一、二丁目に宝永四年（一七〇七）正月七日付の幻化散人すなわち黄檗の禅僧妙幢淨慧の「巡六地藏慈悲利益記序」があり、また終丁三十七丁目ウの本文末行に「僧空無」とあり、巻尾に「巡六地藏慈悲利益記 終 松會三四郎板行」とある。文中書名の「巡」を「シユン」「ジユン」また「めぐり」と音訓し、全丁版心に「地藏利生記」と刻されている。

空無は江戸六地藏の、いわゆるはじめの六地藏の発願造立者として名高い。この空無に『巡六地藏慈悲利益記』の著作があることを西田耕三氏「妙幢淨慧 詩のわかれ」（『江戸時代文学誌』八号、一九九一年十二月のち『近世の僧と文学』二〇一〇年二月、べりかん社所収）によって知った。西田氏は地藏菩薩信仰者妙幢淨慧の行実を、吟味を施した資料に基づいて考察される中で、淨慧が空無の著作に序文を寄せていることや『延命地藏菩薩經直談鈔』（元禄十年（一六九七）板）の著者読誉龍山必夢に資料を提供していたこと等々を明らかにされている。しかし今日も江戸六地藏について、あるいは木食僧について云々するむきは少なくないが、不思議

にも西田氏が指摘された『巡六地藏慈悲利益記』についての言及はない。同書に空無はみずから浄土木食を名乗り、六地藏の造立を発願したいきさつや六地藏の靈驗利益を細かに記しているのである。西田氏の功業が埋もれたままのように思われて久しい。ここに空無の著作を翻刻紹介する所以である。

※

妙幢淨慧は「巡六地藏慈悲利益記序」に、本誉空無上人は智慧慈悲を備えた禅淨兼修の人であって、それがかつて八尺の地藏菩薩像六軀を銅鑄し、江府六阿弥陀仏巡拝の街畔六所に安置したと伝えている。その六地藏の、現存二尊のうち文京区千駄木所在浄土宗一心山専念寺蔵銅鑄地藏像にはいたるところに淨財喜捨名が刻み込まれているが、喉元から胸部中央にかけて「南無阿彌陀佛 第二尊 寶珠地藏 餓鬼道教主」と大きく刻まれ、この一行を挟んで右側に「國家安全／分置干武藏州六所／本願化主同國豊嶋郡江戸下谷池之端影向山心行寺第三世休隱慈濟菴浄土木食比丘源蓮社本誉空無作」、左側に「伏願 見聞引撰六道衆生自他托生／九品蓮界／有無二縁十方／助縁 七衆諸檀越等」と刻されていて、これが下谷池之端影向山心行寺第三世を経歴し同寺慈濟菴に退隱した浄土木食本誉空無の作であることを伝えている。

本誉空無の肖像は元禄五年（一六九二）秋、一髮道人無生撰『本誉空無上人道影贊』（板二丁。玉川大学教育学術情報図書館蔵）に載る「蓮池慈濟老師影」によって、その行実は元禄三年（一六九〇）十二月門弟子某等編『心行寺第三世源蓮社本誉空無上人行狀』（板六丁。同図書館蔵）によって知

られる。右『行状』によると、上人は諱遵察、字空無、社号源蓮社、また放憨子を自称した。石州石見の人で父は山口、母は某氏。寛永七年（一六三〇）十二月三日の生まれで、九歳にして幡誉上人に投じて剃染し、方誉上人に従って業を受けた。十三歳にして幡随意院すなわち武州下谷池之端の神田山新知恩寺に入ってもっぱら浄教を学び、十七歳にして下総生実龍澤山大巖寺に登り、二十二歳にして武州三緑山増上寺に隸した。正保年中（二六四四―四八）には識見浅薄を自省して目黒山に詣りて断食千拜し、また下山して宇賀神を禱して誦呪すること三年、さらに月ごとに相州江之嶋に詣りて密家呪法の神験を感じたが、小石川無量山伝通院開山了誉聖上人の夢告を得て三密の観行による度生の難儀を知悟し、また賜紫沙門洞院涪公の厚誼を得た。二十四歳のとき、陰を自贖して姪欲を断った。

一日芸州広島に行き、行業純一として高名な華降山光明院開基信誉以八上人の余風を見聞して帰ると、幡随意院岳誉感随上人に従って浄土血脈と圓頓菩薩戒を受け、明暦年中（一六五五―五七）には心行寺二世純誉長然上人から主席に迎えられて三世を継いだ。寺観を改め、途絶えていた心行寺開山頓蓮社円誉利的上人創始の万日念仏会を高足空哲等同志五人と再興し、穀を断ち衣を披て常に仏前に在り、長坐不臥日には五百拜を課すること十年、寛文年中（一六六一―七三）の一日、黙坐のとき諸菩薩と護法善神の一室に來現するを見た。仏天の加被を知ってみずから三尊を刻み、仏工に命じて一百尊を造らしめ、これを寺内聖衆堂に安置し、また泥塑像・



空無上人御影  
（玉川大学教育學術情報図書館蔵  
『本誓空無上人道影贊』所載）

銅鑄像を造り、画像を印施し、聖号を手書して衆庶に施した。説法の法筵ごとに受訣するもの凡そ十万。時人から蓮池木食上人と讃称された。その後のある日、黄檗の宗匠に学んだという一居士が來訪したのでこれと交誼を結んで日夜道話するに、詰問に茫然とし、以後禅要の必須なるを感じて打坐に励むと、また一夜心行寺に遊んだ居士から示された詠歌によって仏心宗に不伝の妙あることを確信した。

貞享元年（一六八四）五十四歳のとき疾を得て院主を辞し、高足還誉空哲に心行寺四世を継がせて荷葉菴に退隱した。ここを終焉の地と定め、或いは念仏し或いは坐禅して瀟洒の日々を送った。一日、上人の身悴精涸を知って二人の僧が訪れ、『蘇波呼童子經』『瞿醯經』等に載る「斷食不食鹽不食油」の一文は垢膩を除いて身の清浄を保つための法であって仏道を妨ぐためではない等々の教訓をすると、上人は笑って不持齋は天台定心院の成意比丘に倣ったのだと応え、鹽を受けこれを嘗めたが壮年以來の辟穀は老年になっても改めなかった。こうした日常を送る上人を欽仰して四來蟬聯し、仏像を求め聖号を求めた。上人はある時、『天如性則禪師語錄』（第六一銅佛贊頌序）に載る錢塘照庵の炬菩薩という人が四十八人会を結んで銅像を鑄した話を読み、これに効って弥陀像一千体を鑄て道俗深信者に施した。すると一夜の夢に姿色典雅な女人が現れて上人の施行を讃じ、老後の利益、往生の助因となるからさらに造仏すべきことを勧め、ために擁護して家珍を喜捨すると告げて不忍蓮池に帰ったという。

元禄三年（一六九〇）四月十五日、上人再興の万日念仏会が満散した。空無を継いだ四世空哲上人は不幸にして早世したが後を同志らが助力したのである。江戸の貴賤、諸国の緇素が蟻集して歡喜稱讃し、十声念仏を受け、上人手書の名号を求める者数万に及んだという。時に上人歳六十一。浄土の訣を授与した道俗一百余人、僧尼を度すこと若干人、問法結縁者はその数を知らない。

そのころ近隣に一信士があった。信士は元禄二年晩春二十四日に地藏菩薩を夢に見、今年三年また夢に愛宕山の地藏菩薩を拝し、さらに地藏像を一室に安置する夢を見た。この信士がたまたま一僧から長一丈の木彫地藏像を莊嚴供養することを条件に譲り受け自邸に安置した。信士の夢は現実

となったのだが、これを耳にした空無上人は信士に会って、「我ニ與ヘヨ。我此ノ大像ニ依ツテ銅像六軀ヲ鑄造シテ武城ノ六所ニ安ンジテ、以テ羣生ヲ福利スベキヲ欲ス」と力説すると、信士は大喜してこれを上人に譲った。ここにおいて四衆は競って浄財を喜捨したので日ならずして鑄像は完成した。まことに奇事というべきで、同様の奇瑞は鎮西の聖光上人、信貴山の円能上人など地藏の靈応を得た所伝は史籍に載って枚挙にいとまがない。ここに上人は老母尼に孝養を尽くし、居庵の扁額を慈濟菴と改め、弥陀地藏の願によって尽未來際に迷倫を救度せん素懷を抱き続けている。

※

門弟子某等が師匠空無の行実を編じたのは、空無が開山円誉利的上人創始の万日念仏会を中興し、およそ三十五年をかけて元禄三年（一六九〇）四月十五日にめでたく満散したと、この年六体の地藏像を銅鑄しそれを武州六所に安置し終えたこと、さらにこの年甲子を遇した師匠に対する祝賀意奉呈のためであったと思われる。すなわち右『行狀』は元禄三年十二月一日空無六十一歳までの行実を記しているが、空無のその後の行実は、空無には『巡六地藏慈悲利益記』のほかにも『大黒天靈驗記』『十夜念佛發願由來根元記』の撰があり、門弟子等の編じた『發願文和談鈔』（元禄七年板、三卷三冊）があつて瞥見しうる。享保三年（一七一八）正月淺倉又兵衛板『大黒天靈驗記』（奥『大黒福德靈驗記』三卷三冊）の巻尾に「空無八十八歳老翁書之」とあり、享保五年正月柳屋徳右衛門・松屋金四郎板『十夜念佛發願由來根元記』（奥『陰陽心目人身生死世俗叢集』三卷二冊）の序に「享保五庚子正月月中旬空無九十一歳謹書」巻尾に「九十一歳老翁書」とあつて、空無が卒寿を超える長寿を保ち、明晰に弛むことなく著作に励んでいたと知れる。しかしいまだ没年を明らかに得ない。

※

門弟子某等編『行狀』には延宝三年（一六七五）臨濟宗龍寶山大徳寺二一八世で、元禄二年（一六八九）江戸品川萬松山東海寺住持となつた天倫宗忽（一六二六―一六九七）と、渡来明僧で大阪生野南岳山舍利尊勝寺を董し、のち黄檗山萬福寺七世を継いだ悦山道宗（一六二九―一七〇九）による元禄四年夏付の序があることから、空無が禪門と深く交流したことが推察され

るが、『行狀』に「時<sub>ニ</sub>有<sub>二</sub>一居士<sub>一</sub>嘗<sub>テ</sub>見<sub>二</sub>黄檗下ノ宗匠<sub>ニ</sub>來<sub>ル</sub>」と伝える一日訪ね來た居士はおそらく妙幢淨慧のことと推量される。西田氏が指摘されたように『巡六地藏慈悲利益記』には淨慧の序を載せるばかりでなく、さらに「第廿五 谷中感應寺京都壬生延命地藏移造立之事」には淨慧が東叡山寛永寺山内に地藏菩薩丈六坐像八尺を作り、また京都壬生地蔵の写しを作つて谷中長耀山感応寺に安置したと記し、「此一尊には、六地藏の尊形一体に、出現の功德はあるものなるべし」と述べ、「妙幢」は地藏を意味することばであるから地藏が地藏を作つたことになると、淨慧を地藏の化身のごとくに称賛している。空無が武州に六地藏を安置しようと発願した根源には、おそらく妙幢淨慧との交流とその教示が深く影響しているように思われる。

六地藏の發願建立については『利益記』「第四 江戸六地藏鑄形木像湯嶋靈雲寺安置之事」に『行狀』の所伝を補う記述がある。それによると、空無に木像地藏菩薩像を譲つた一信士の名は記されていないが、この信士に靈夢に符合する地藏菩薩像が近所の寺にあることを教えたのは元智という真言の所化であつた。元智のちに湯嶋靈雲寺の覚彦淨嚴の弟子になり禪融房と名を変えた。信士は求めた地藏菩薩像を自邸に安置したが、その熱意に感じてこれを空無に譲つたのである。空無が信士と讓渡の契約をしたのは、雷火で焼失した（元禄二年（一六八九）天台宗越後国分寺の五智如來の再建を志したが他門ゆえに断念し、京都の六地藏のように江戸にも六地藏を造立しようという素願を抱いていたからである。空無は幸い入手したこの木像を銅像の鑄型とし、成就ののちこれに彩色して靈雲寺に寄進した。靈雲寺ではこれを覚彦律師がさらに結構を整えて再興したのであるという。なお元智は六地藏第二番千駄木專念寺の銅像に「助縁」者の一人としてその名が刻まれており、元禄十年覚彦撰『屈請諸徳疏』（写一篇。獅子吼山教興寺蔵）の靈雲派諸徳僧名中に「上板橋 文殊院 禪融房」と見える。また元禄十五年惟宝蓮体撰『淨嚴大和尚行狀記』元禄六年条に「今年三間四面ノ堂ヲ建ツ。本尊ハ木食空無カ寄附セルナリ。靈驗掲焉ナリ。」（上田靈）（浄嚴和尚傳記事資料集所収）とあつて、浄嚴・蓮体子弟と空無の交流が知られ、また空無の著述の正確なことが慥かめられる。

※

幻化散人妙幢淨慧の「巡六地藏慈悲利益記序」に『巡六地藏慈悲利益記』刊行の経緯が記されている。空無が銅鑄八尺の六地藏をそれぞれ駒込向丘の浄土宗桂芳山瑞泰寺に檀陀地藏、駒込千駄木林の浄土宗一心山専念寺に寶珠地藏、谷中新堀村諏訪社の真言宗宝林山浄光寺に寶印地藏、下谷池之端萱町の浄土宗影向山心行寺に持地地藏、上野の天台宗東叡山寛永寺大仏堂内に除蓋地藏、浅草の金龍山浅草寺中正智院に日光地藏として安納すると、これを快挙として随喜した禅門の高僧たちが記や賛を贈って顕揚した。空無はこの記・賛を一書に編じ、『巡六地藏菩薩記賛』と書名して梓行したが、しかし世俗には難解すぎて不便であった。そこで空無はみずから六地藏の功德を和語をもって易しく説いた。それが『巡六地藏慈悲利益記』であるという。

淨慧の序から垣間見えるように、空無の行業を高く評価したのは浄土門ではなく禅門であった。『行狀』に寄せられた序文は臨済の天倫宗忽・黄檗の悦山道宗であり、「利益記序」も黄檗の淨慧であって、そこには浄土門の僧名はない。他門の淨嚴・蓮体も認めるように空無は慥かな木食僧であって、『行狀』は退隱後も禅淨兼修の木食行を送る空無のもとに、その身悴精涸を案じて二人の僧が訪れたと伝えている。誰をいうのか不明だが、過度の木食行を諫める両僧に、空無は笑って不持齋は叡山定心院の成意比丘に倣ったのだと応えているから、退隱後は通常の木食行に加えてさらに不持齋をも行じていたのである。彼等が空無の身を案じ教訓した理由が知れるが、それでも鹽は嘗めても辟穀は止めなかったというから、空無は日限を区切ってする尋常やわな木食行者ではなかったのである。その空無は二十四歳のときみずから男茎を割愛して淫欲を断った。浄土門においては陸奥桑折の守一無能（一六八三—一七一九）が羅刹の清僧として緇素の絶大な尊崇を受け、今日においても称揚の声は止まない。その無能よりもおよそ半世紀も前に世に出て江戸に六地藏を建立し、厳しい木食行を生涯とした羅刹僧空無が世に埋もれて久しい。無能が念仏専修、空無が禅淨兼修だったからであろうか。不思議なことである。不思議といえば、空無と同年の生まれで、池之端萱町心行寺至近の仲町に菓舗錦袋園を開き、不忍

池中に経島を築き、東叡山に勧学講院を建てた黄檗の了翁道覚（一六三〇—一七〇七）について空無がまったく触れていないのが不思議である。心行寺から了翁の動向は手に取るように見えていたはずであり、巷間に絶大な人気を誇った錦袋園了翁を知らなかったはずはない。一日心行寺を訪れて空無に禅要の奥儀を教示した一居士を妙幢淨慧と推量したが、あるいは羅刹の傑僧了翁道覚であったのであろうか。

〔翻刻凡例〕

- 一、底本には駒澤大学図書館蔵『巡六地藏慈悲利益記』（全一冊。浄土木食空無撰、幻化散人室永四年正月七日付序、松會三四郎板）を採った。
- 一、可能な限り原文の表記を尊重し、明らかな誤刻もそのまま翻刻した。
- 一、合字は「ㄗ」（コト）のみ採り、以外は通行の表記に改めた。
- 一、「ㄱ・ㄷ・ㄹ」「玉・王」等の混用字体は文意をとって適字を置いた。
- 一、虫損・薄摺等判読不能の文字は字数分の空格（□）を置いた。
- 一、半丁ごとに丁数を示し、各話間に空行を置いた。



B A



B



A

泥土地蔵  
(宝林山浄光寺蔵)